

# 保育所その他の入所児中、問題児の生活治療の技術に関する研究 (1)

——問題行動質問表の作製と問題行動児スクリーニング基準の設定——

研究第9部 多 勢 豊・次

## 目 的

保育施設において、保育者が困っている問題の一つは、クラスの中で見られる子どものいろいろな問題行動、ならびに母親の訴えてくる家庭におけるいろいろな問題行動を、日常保育の中でどのように処置するかである。

問題行動をもつ子どもをすべて、専門の相談所、研究所、病院などで心理治療その他を受けさせることは、いろいろな事情で不可能なばあいもあり、又それらの施設で該当の子どもだけを、切りはなして治療するよりも、むしろ日常の保育場面の中で、自然に治療するのが良い

かも知れない。

そこで、専門の処で行なっている心理治療的な技術を、保育者に日常保育の場面でいかにとり入れてもらうかが課題となるが、その場合、とり入れた技術的效果がどのように表われてくるかを測定することが必要である。

そこで、この度は測定法として、幼児の問題行動調査表を作製し、調査表の検討、ならびに調査表を通してとらえられる問題行動の表われ方をみようを試みた。

## Ⅱ 方 法

調査表は次の表の如く、問題行動は行為にかんするもの、習癖にかんするもの、身体にかんするものに三大別され、さらにそれらは、いろいろな問題傾向に細別され、それらがいくつかずつの問題項目をもつように構成された。大体4才から6才までの幼児にみられる問題行動246(行為——144, 習癖——59, 身体——43)であり、第1表のごとくである。

対象は、都内のある幼稚園において、6クラスからそ

れぞれ、担任教師が“引込思案”と思う子ども3名、“おちつきがない”と思う子ども3名、計6名、全部で36名である。そのうち2名はチェックが不備なために捨てた。

この調査表を、親ならびに担任の保育者に、当てはまると思う行動にチェックしてもらった。同時に、登園時から退園児までの1日間、3人の調査者の各々が2人ずつの子どもを観察し、当てはまると思われる行動に、同じくチェックした。

## Ⅲ 結果ならびに考察

1) 3者のいずれかがチェックした行動をすべて、“あり”とし、全行動数によつて集計し、これに多いものから順位をつけて列べた結果は第1図のごとくなる。

これによると、問題行動数30%をもつ幼児を筆頭に、4%しかもたない幼児にまでわたっている。前述したように、対象児として、とくに“引込思案”か“おちつきがない”かという幼児を選んだのだが、担任の保育者によつて、このように評価された子どもでも、保育者、母親、さらに調査者によつて、質問表によつてチェックさ

せてみると、意外に問題行動の少ない幼児のいることがわかる。

2) 行為、習癖、身体的側面別に分けてみると、第2図のごとくなるが、各子どもによつて、かなりの多様性のあることがわかる。

又、問題傾向においては、それ以上の多様性が見られる。たとえば、“引込思案”と“おちつきがない”という問題傾向は、互いに相反する傾向と考えられたので、そのように評価された子どものいろいろな問題傾向は特

第1表

問題面	番号	問題傾向	問題項目
行為 144	1. 1	攻撃がま 無抵抗 依存 無引込 動作か 無感 自発性 神不安 不興 おちつき 自己 固執 赤ん坊 素行	撃抗ま配争抗存案ん動如質れ奮し示的るる問題
	1. 2		13
	1. 3		9
	1. 4		5
	1. 5		5
	1. 6		4
	1. 7		6
	1. 8		6
	1. 9		15
	1.10		6
	1.11		6
	1.12		11
	1.13		8
	1.14		5
1.15	7		
1.16	7		
1.17	8		
1.18	9		
1.19	8		
1.20	5		
	10		
習癖 59	2. 1	食事の問 睡眠の問 性的問 クバの異	題問題七
	2. 2		9
	2. 3		16
	2. 4		7
	2. 5		6
身体 43	3. 1	中樞神経系 呼吸器系 消化器系 泌尿器系 分泌系 皮膚系 筋系 感覚系	系系系系系系系
	3. 2		5
	3. 3		6
	3. 4		5
	3. 5		6
	3. 6		5
	3. 7		4
	3. 8		9
	3		

に異なっているであろうという予想を立てていた。少くとも、この度の対象児34名の範囲内では明らかなことは

云えないが、“引込思案”と“おちつきのなさ”最が高の幼児を一人ずつ選び、全問題傾向の表われ方を較べてみると、第3図のようになる。これによると、“引込思案児”は“攻撃”が非常に少なく“神経質”“不安・怖れ”が多い。それに反して、“おちつきのない”方は、“攻撃”が多く、“神経質”、“不安・怖れ”は全くないか、非常に少ない。行為の面では、このような相反する傾向が見られるが、習癖と身体の面では特徴的な差はみられない。

そこで、全対象児を“引込思案”の得点順位<sup>\*</sup>に並べ、それを軸にして、“攻撃的”、“神経質ならびに不安・怖れ”<sup>\*\*</sup>、“おちつきなし”の得点をプロットしてみると、第4図のようになる。

そして、これら3つの傾向の両端の5~6名をみると大体、“神経質、不安・怖れ”においては、顕著な差が見られるが“攻撃的”においてはあまりみられず、“おちつきなし”において、いくぶん見られる程度である。したがって、“引込思案”と“神経質ないし不安・怖れ”を一つの極として対象児を選ぶことは妥当と思われるが、その反対の極として、調査に当つて、“おちつきなし”を選んだことは妥当でなかつたかも知れない。

3) そこで今後の問題として、(1) 問題行動の分類とそれらの関連性、(2) 質問項目の言語表現、(3) 評価者の選択等を検討して行かなければならない。

\* 24位までは順位がついたが、それ以下はすべて零で、順位がつけられず、ランダムに並べてみた。  
\*\* この両傾向を一応、合わせてみた。

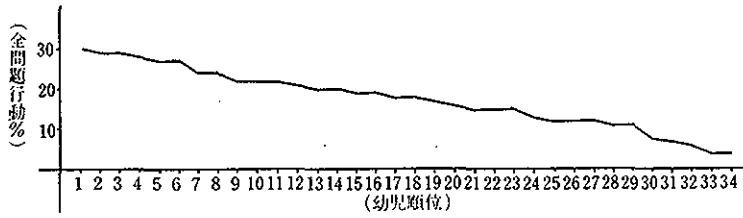
IV 要 約

[文 献]

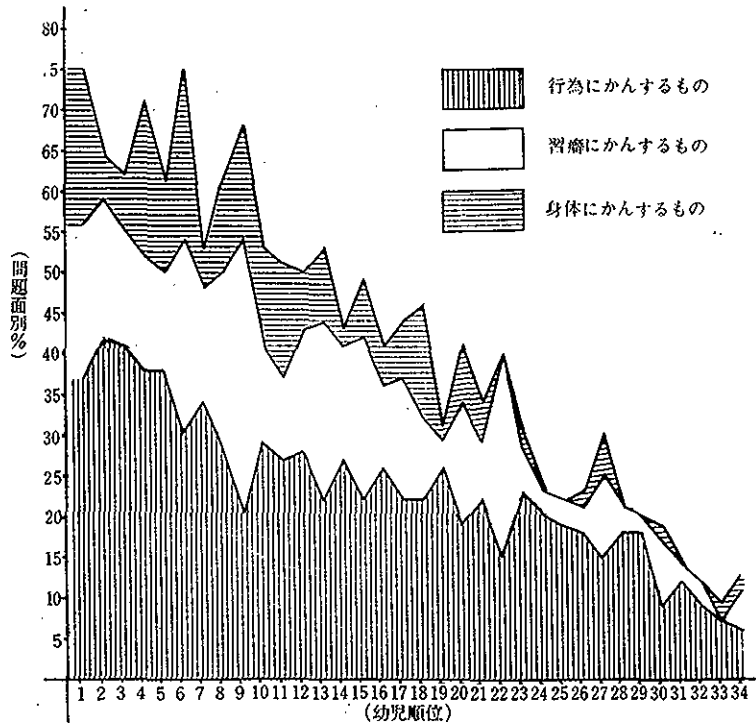
4才児から6才児に当てはまる問題行動質問表を作製し、クラスで特に“引込思案”、あるいは“おちつきがない”幼児34名について、担任保母、親、観察者の3者にチェックさせた。  
質問紙によれば、問題行動が非常に少ない子どもがあらわれ、保母だけによる日常行動の評価の問題、質問項目の作製の問題、3者による評価の問題などが再検討されなければならぬことが感じられた。又、“引込思案”あるいは“おちつきのない”傾向によつて幼児を2つにスクリーニングすることが妥当か否かも検討された。

1. 新井清三郎：乳幼児習癖の子備調査、小児の精神と神経、昭40年6月号、P37  
2. Kanner, L : Child Psychiatry, 1957  
3. 高木俊一郎：小児精神医学の実際；1964、 P186~199  
4. 多勢豊次：幼児における問題行動の分類とその時間的推移をとらえる試み；立教大学心理・教育学科年報、昭36、 P87

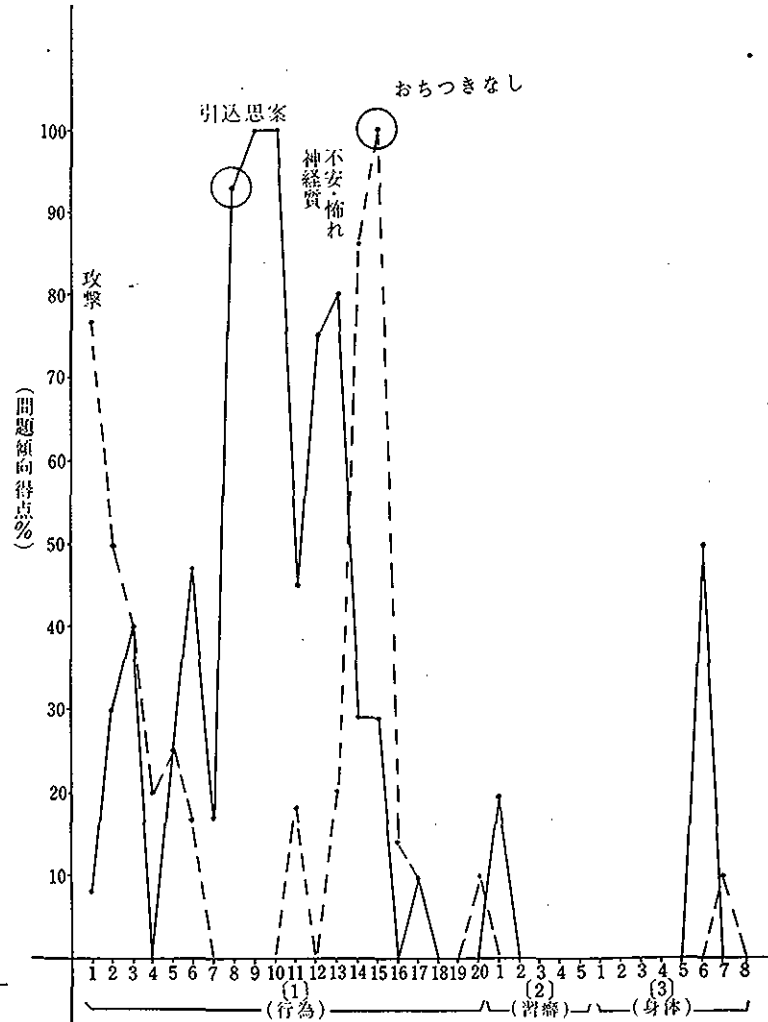
第1図



第2図

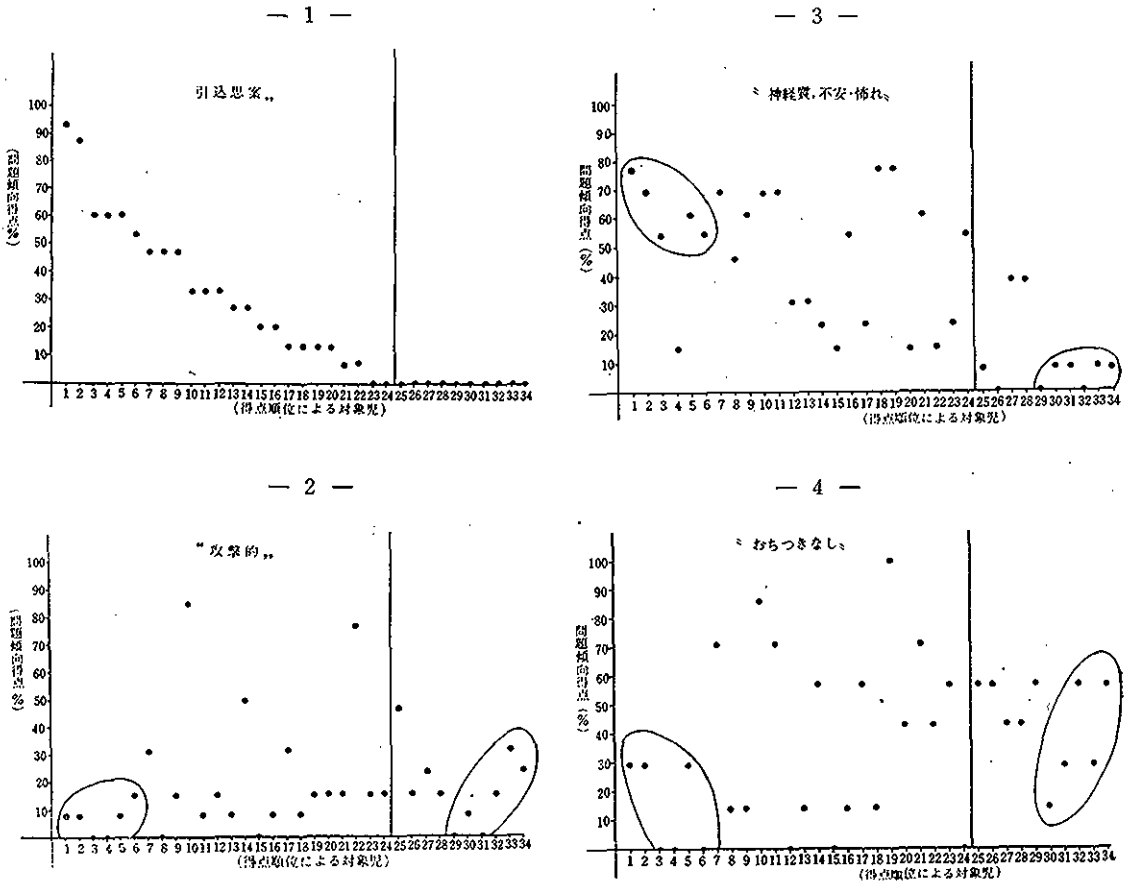


第3図



多勢：保育所その他の入所児中、問題児の生活治療の技術に関する研究

第4図



・A Study of Treating the Behavior Problems of the Kindergarten Children (1) —Preliminary Screening of the Children through Check-list Questionnaire.

Toyoji Tase

Thirty-four young children who are evaluated by the teacher, as 'Withdrawal' and/or 'Restless' in classroom were evaluated through check-list questionnaire by teacher, parents, and a college student.

The problem of the classification of behavioral disorders in young children, the problem of the method to evaluate the severity of disorders, and the problem of dividing into 'Withdrawal' and/or 'Restless' were discussed.